

## いのちのケアを模索する

NPO 法人ウエスレヤン・コミュニティカレッジ 内村公義

### 1. 死にゆく人から学ぶこと

a) 長崎で在宅緩和ケアの先頭に立ってきたホームホスピス中尾クリニックの中尾勘一郎医師が 2012 年にデイホスピス（現在は、ふらっとほすびす相談室）「希望のひかり」を開設。その活動の中で医師としての考え方が大きく変化したという。それは、「患者さんにどんなふうに安らかな最期を迎えていただくか」から「最後まで前に向かって進もうとする人たちをどう支えるか」への観点の変更であった。

b) これは、エリザベス・キューブラー・ロスが死にゆく人から学んだことでもあった。「死の床にある人たちが教えてくれた意外なレッスンのひとつは、致命的な病気の宣告を受けたときに人生が終わるのではなく、そのときに人生がほんとうに始まるのだということだった」。

### 2. 「死の看取り」から「いのちのケア」へ

a) 死の宣告を受けたときに「人生が終わる」と感じられるのは、生物学的生命の終りが宣告されることによって、人生の意味・存在の価値が失われてしまったと思われるからである。医学はこれまで、危機に瀕する生物学的生命を救うこと（救命・延命治療）を使命とし、それが不可能であれば、あるいはそれと並行して、死に至る過程に伴う苦痛を緩和すること（緩和医療）に力を尽くしてきた。

b) しかし、それだけでいいのか。医学哲学者中川米造は言う。「これまでの医学は生命を診てきたが、これからの医学はいのちも診なければならない」。生物学的生命と対比される「いのち」とは「生の意味・存在の価値」を指す。「いのちを診る」とは、失われてしまったと思われる人生の意味・存在の価値が再発見され、最後まで生きようとする意欲が回復するのをサポートすることである。これが「いのちのケア」である。前述の中尾勘一郎医師の観点変更は、「死の看取り」から「いのちのケア」への転換と呼ぶことができよう。中尾医師は、これを「攻めのケア」と呼び、その内実を「おいしい食事と人のつながりの場を提供すること」と言い切る。つまり、いのちのケアは、医療の枠を越えた広義の福祉の課題である。したがって、それを専門的に担うのは介護職だと、岡部健は言う。

### 3. 「いのちのケア」としてのスピリチュアルケア

a) 介護や看護の現場では、「死にたい」「殺して」という利用者・患者の訴えの前で、ケアする人たちが立ちつくしている。このような言葉の奥には、存在の意味の消滅によって生じる苦痛がある。この痛みが「スピリチュアルペイン」と呼ばれる。「スピリチュアルペイン」を抱える人に対するケアが「スピリチュアルケア」であり、それを提唱したのは、現代ホスピス運動の創始者シシリー・ソンドースである。彼女は、身体的ケア、心理的ケア、社会的ケアにスピリチュアルケアを加えたトータルケアをホスピスで実践しようとした。

b) ホスピスケアの基本姿勢は **not doing but being** と言い表される。この姿勢の根底にあるのは、「生の価値は何かができる>ことにあるのではなく、弱く無力な自分がただ<居る>ことに価値がある」(清水哲郎) という価値観である。<できる>ことに生きる価値を見出している場合には、何もできなくなると生きる価値が見失われ、「死にたい」という思いに駆られることになる。スピリチュアルケアの課題は「<できる>ことから<居る>ことへ」という価値の転換を促すことである。言い換えれば、「何もできなくていい。ただ居るだけでいい」という無条件の自己肯定を支えるケアがスピリチュアルケアであり、それが「いのちを支えるケア」である。

c) 人は誰も一度はこのようなケアを受けたことがある。それは赤ちゃんの時。人は生まれてしばらくは何もできない。しかし、ただ居るだけで愛された。それが人生の基盤である。しかし、長ずるにつれて、何かができはじめて評価されるという「条件付き肯定」しか経験しなくなる。その結果、自分の存在をあるがままで肯定することができなくなる。高齢になり、自立性が失われ、人間としての尊厳が失われたと思われるとき、それを回復するためには、そんな自分の現実をあるがままに受け入れることが必要である。

d) それを支えるケアが「いのちのケア」である。その方法は、スピリチュアルペインが、例えば「死にたい」という訴えとして洩れてくる時に、それをそのまま受け止めることであり、そのために「聴く耳」を差し出すことである。

### 4. 死をやわらかく見つめる

a) スピリチュアルペインの表出に黙って耳を傾けることはなかなか難しい。その理由の一つは、「死にたい」と訴えられたり、自死をほのめかされたりすると、その言葉に思わず拒絶的に反応してしまうからである。

ある老人施設の介護職員の言葉：毎日のように利用者さんから「死にたい」という言葉を聞きます。私自身、死についてのマイナスのイメージがあり、その言葉を頻発する利用者さんへの対応に悩んでいます。

b) 死がタブー視され、忌避されてきた一因は近代医学にある。救命延命を使命とする医学にとって死はあってならぬ「異常事態」とみなされてきた。そこから「死への過緊張」が生まれる。それをほどく必要がある、と徳永進は言う。

